

論文内容要旨

論文題目

Disclosing unavoidable causes of adverse events improves patients' feelings towards doctors

(有害事象における回避不可能な原因の情報開示は医師への患者の感情を改善する)

指導(紹介) 教授 : 佐藤 慎哉
氏 名 : 中西 淑美

【内容要旨】(1, 200字以内)

課題設定

裁判外紛争処理の1つの医療メディアーションは、認知バイアスに対して情報開示と共有を行い、医師・患者の信頼関係の再構築を行うモデルである。このモデルの中心である情報開示に焦点を当て、医療紛争での原因情報開示が医師に対する患者の否定的感情がどのように変化するかを実験的に明らかにすることを本研究目的とした。

方法

意図的原因とは医師の不注意又は不十分な共感態度であり、回避可能の場合とし、無意図的原因とは医師の態度に無関係な原因、不可避の場合と定義した。質問票は日本の4都市の外来患者385人に配布した。質問のシナリオは、医師への否定的感情を惹き起こす医師の態度で、その内容は回避、拒否、支配、インシデント、有害事象とした。感情評価は、まず①不快情動、次に②否定的感情を調査し、最後に前記の①、②の2種類の原因情報開示に対する評価を7点評価(1:全く同意できない、7:全く同意できる)で求めた。統計記述は平均値(標準偏差)、分析はANOVA等を用いた。

結果

有効回答は62.9%(242/385人)であった。性別では女性が3.2倍で男性より多かった。20~69歳が全体の89.6%であった。診療科別では内科系が50.4%、外科系は45.5%であった。

①の不快情動は全てのシナリオで発生した。そして②の否定的感情も同様に全てで発生した。その評価点数は有害事象が最も高く、18.9(3.2)、インシデントで17.8(3.8)、支配は14.5(4.2)、拒否は13.6(4.1)、回避は13.5(4.6)の順であった。有意差では事象とインシデント($p<0.0001$)、及びインシデントと支配($p<0.001$)間で認めた。また、性差の有意な影響は支配の場面でのみであった。さらに、この否定的感情に意図的原因情報が開示された後の場面では、否定的感情の度合いを示す値は、前値より3(有害事象)~33(インシデント)%と有意に上昇した。これとは対照的に無意図的原因情報の開示の場面では、11(支配)~43(回避)%と有意に低下した。

考察

医師の不注意や態度の原因情報開示では、患者の医師への否定的感情は変化を引き起こしたことが結果から示された。この変化は有害事象で最も大きく、回避が最も低かった。また、原因情報開示後、患者の意に反すると考えられていた医師の態度が再評価を受け、原因情報の内容により否定的感情が強まったり、逆に弱められたりした。こうした点数の相違は臨床現場で経験する患者の感情変化と同様であり、経験的に妥当な結果と理解した。また、認知齟齬による感情が変化したことから、新しい情報開示は推論評価を介在させ、認知齟齬解決の可能性が示唆された。

結論

医師の一見配慮のない患者への態度は否定的感情を患者に惹起された。医師の態度の無意図的な原因情報開示は否定的感情を低下させた。原因情報開示は医師の態度が無意図的、意図的に係わらず開示すべきである。

平成28年 1月21日

山形大学大学院医学系研究科長 殿

学位論文審査結果報告書

申請者氏名： 中西 淑美

論文題目： **Disclosing unavoidable causes of adverse events improves patients' feelings towards doctors.**

(有害事象における回避不可能な原因の情報開示は患者の医師への感情を改善する。)

審査委員：主審査委員 山崎 健太郎

副審査委員 大谷 浩一

副審査委員 佐藤 慎哉



審査終了日：平成 28年 1月 21日

【論文審査結果要旨】

医療現場において患者・医療者間の信頼関係は重要である。両者の信頼関係の低下は治療効果にも影響し、さらに医事紛争にも発展するおそれがある。しかしながら現実には様々な要因により、医師をはじめとした医療者と患者との関係が悪化する場合が少なくない。医師・患者の信頼関係の再構築に有効な手段の一つに医療メデイエーションがある。これまで様々な医療メデイエーションの手法が試みられているが、その効果について定量的な調査を行った報告は極めて少ない。本研究では、医療メデイエーションにおける医師・患者間の対話促進の手段として、両者信頼関係の悪化原因を患者に開示することにより、患者の医師に対する否定的対人感情の変化を調査し効果の判定をおこなっている。

調査は、無作為に選ばれた外来患者385人を対象被験者として、被験者に質問票に記入してもらい、その記入内容を解析している。質問票の質問内容は、信頼性・妥当性が確認された多くの先行研究に基づき、対人好悪の形成過程として、情動と認知の関係の二重過程理論に依拠して十分に吟味して設定した。具体的には、医師が患者に対して回避的行為、拒否的行為、支配的行為、小インシデントとなる行為、有害事象となる行為に相当する5場面を設定し被験者に提示し、各場面のストーリーを読んだ後に、その医師に対する否定対人感情（苦手である、信頼できない、診てもらいたくない）の強さを「非常にそう思う」から「全く思わない」まで7段階法で評価させて点数が高いほど否定対人感情が強くなるよう点数化した。次に、各々の場面に対して、医師の注意や配慮で回避可能な原因と回避不可能な原因を各々設定して、その原因情報を被験者に提示して否定対人感情の点数の変化をみた。

調査の結果、医師の態度に患者から見た「回避不可能」であった場合には否定対人感情の点数が開示前に比較して低下することが判明した。この低下の程度は統計学的手法を用いて有意性を検証している。またこの結果は 医師態度の原因情報開示が、患者の医師に対する否定対人感情を変化させることを実験的に初めて証明したと同時に 原因情報開示が医師に対する否定感情を患者自身が再評価する機会を提供する可能性を示唆している。

本研究は上記の通り、医療メデイエーションの効果を先行研究や統計学的手法で客観性を担保した新たな分析方法により実施し考察を試みており、自らの分析結果を踏まえて対策を提言し、患者も納得できるより良い医療の実施に貢献すると思われる。従って本論文は学位（医学博士）に値するものと判断した。

(1, 200字以内)